

## 公開本数・公開作品

## 公開本数

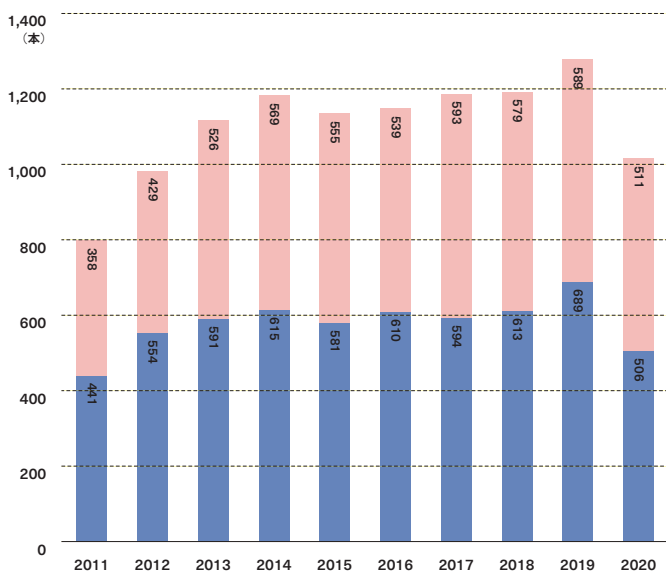
映画の公開本数は、1955年以降2004年までは大体550-650本を推移してきたが、731本を記録した2005年以降、ほぼ毎年増え続け、2013年に日本映画、外国映画とも500本以上となり公開本数は1000本を越えた。これ以降、公開本数が1000本を下回ることなく、2019年には、日本映画689本、外国映画589本、合計1278本が公開された。2020年もコロナ禍の中、日本映画506本、外国映画511本の1017本が公開されている(映連発表数値)。前年に比べると、日本映画の公開本数は183本減、外国映画は78本減となっている。→ fig.06

## 興行収入

2020年の興行収入は、日本映画が1092億7600万円(前年比76.9%)、外国映画が340億900万円(前年比28.6%)、合計1432億8500万円で、前年比54.9%となっている。

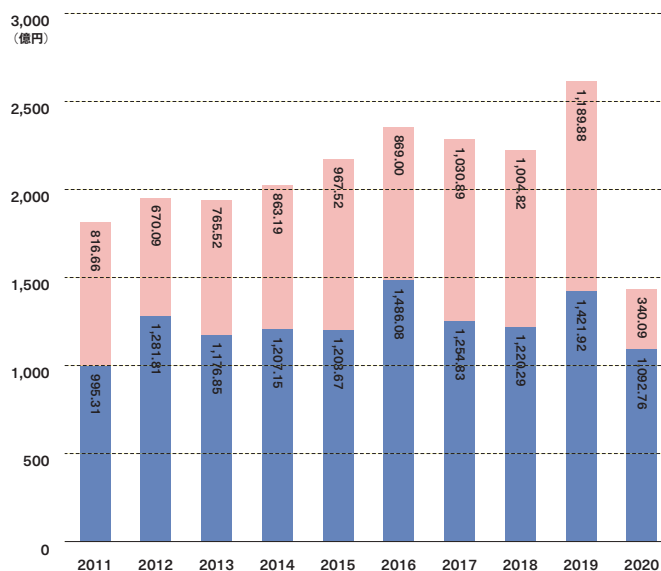
コロナの影響がより大きかったのは外国映画の興行である。前年と比較すると、7割以上減少している。ハリウッド映画の公開延期が相次ぎ、興行収入が10億円を越えた外国映画は、『スターウォーズ/スカイウォーカーの夜明け』(2019年12月公開)、『パラサイト 半地下の家族』(2020年1月公開)、『TENET テネット』(2020年9月公開)、『キャッツ』(2020年1月公開)の4本のみとなった。

fig.06  
公開本数の推移2011-2020



	公開本数			シェア	
	日本映画	外国映画	合計	日本映画	外国映画
2011	441	358	799	55.2%	44.8%
2012	554	429	983	56.4%	43.6%
2013	591	526	1,117	52.9%	47.1%
2014	615	569	1,184	51.9%	48.1%
2015	581	555	1,136	51.1%	48.9%
2016	610	539	1,149	53.1%	46.9%
2017	594	593	1,187	50.0%	50.0%
2018	613	579	1,192	51.4%	48.6%
2019	689	589	1,278	53.9%	46.1%
2020	506	511	1,017	49.8%	50.2%

fig.07  
興行収入の推移2011-2020



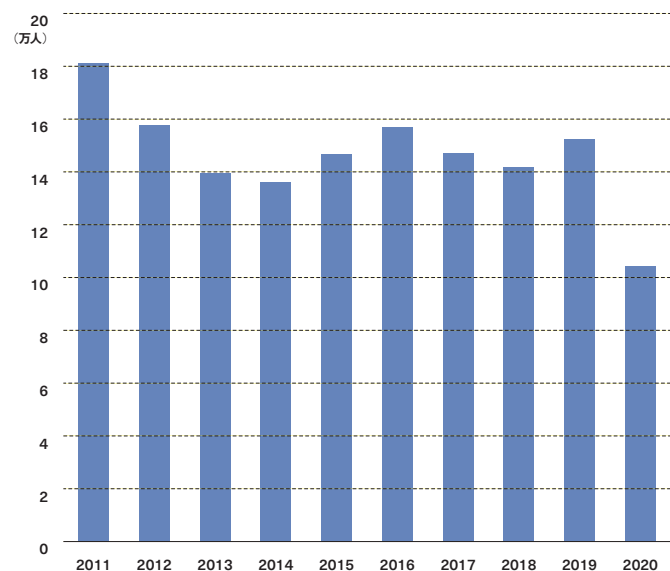
	興行収入(億円)			シェア	
	日本映画	外国映画	合計	日本映画	外国映画
2011	995.31	816.66	1,811.97	54.9%	45.1%
2012	1,281.81	670.09	1,951.90	65.7%	34.3%
2013	1,176.85	765.52	1,942.37	60.6%	39.4%
2014	1,207.15	863.19	2,070.34	58.3%	41.7%
2015	1,203.67	967.52	2,171.19	55.4%	44.6%
2016	1,486.08	889.00	2,355.08	63.1%	36.9%
2017	1,254.83	1,030.89	2,285.72	54.9%	45.1%
2018	1,220.29	1,004.82	2,225.11	54.8%	45.2%
2019	1,421.92	1,189.88	2,611.80	54.4%	45.6%
2020	1,092.76	340.09	1,432.85	76.3%	23.7%

コロナ禍で、劇場公開を諦め、配信での公開となる作品、配信と劇場で同時公開となる作品もあり、不安定な状況が続いている。2021年2月現在も、欧米の多くの映画館が閉まっており、現在のような劇場公開と配信の関係が常態化していくのではないかと懸念されている。ハリウッド映画だけでなく、フランス映画なども本国での公開ができず、公開延期となる作品、日本での公開が世界初となる作品も見られた。

コロナがいつどのような形で収束するのか、コロナ後、映画館での興行の正常な形がどのようなものになっていくのか、先行きは不透明である。

→ fig. 07, 08

fig. 08  
1作品当たりの観客数の推移(2011-2020)



	公開本数(本)	観客者数 (千人)	1作品当たりの 観客数	前年比
2011	799	144,726	181,134	
2012	983	155,159	157,842	-23,292
2013	1,117	155,888	139,560	-18,283
2014	1,184	161,116	136,078	-3,482
2015	1,136	166,630	146,681	10,604
2016	1,149	180,189	156,822	10,141
2017	1,187	174,483	146,995	-9,828
2018	1,192	169,210	141,955	-5,040
2019	1,278	194,910	152,512	10,557
2020	1,017	106,137	104,363	-48,149

## 公開規模

——  
 コミュニティネマセンターではインターネットに掲載された情報を元に「公開作品」リストを作成している。2020年の公開本数は日本映画482本、外国映画540本、合計1022本という数値を得ている。映連発表の数値は、日本映画506本、外国映画511本、計1017本となっており、多少の齟齬があるが、こちらで得たデータを元に公開作品の中味を見てみる。

## 公開規模

「300館以上」の映画館で公開されたのは、日本映画34本、外国映画14本である。  
 日本映画では、『劇場版「鬼滅の刃」無限列車編』(10月公開)が400館を越える映画館で公開され、『STAND BY ME ドラえもん2』(11月公開)、『映画ドラえもん のび太の新恐竜』(8月公開)、『映画クレヨンしんちゃん 激突!ラクガキングダムとほぼ四人の勇者』(9月公開)といった定番の

アニメーションも350館以上で公開されている。例年、こういった人気アニメ作品が興行収入の上位を占めてきたが、2020年は、3月下旬にコロナの感染が拡大、4月には緊急事態宣言が出され、「ドラえもん」をはじめ、春休み～ゴールデンウィークに公開される子ども・家族向けのアニメーションが公開延期となった。映画館再開後も50%の客席制限が続く中では家族(ファミリー)層の集客は難しく、回復にはまだ時間がかかるものと思われる。他方、『今日から俺は!! 劇場版』(7月公開)、『糸』(8月公開)、『事故物件 怖い間取り』(8月公開)、『罪の声』(10月公開)、『浅田家!』(10月)など、映画ファン、若者層を主なターゲットとした作品が手堅く集客している。  
 外国映画では300館以上で公開された作品は14本あるが、興収が10億円を越えたのは『TENET テネット』(9月公開)と『キャッツ』(1月公開)だけである。300館以上の規模で公開された作品はすべてシネコンのみで上映されている。「150館以上」で公開された日本映画、外国

映画も概ねシネコンのみでの上映となっているが、『窮鼠はチーズの夢を見る』(行定勲監督)、『MOTHER マザー』(大森立嗣監督)、『おらおらでひとりいぐも』(沖田修一監督)、『星の子』(大森立嗣監督)、『スパイの妻 劇場版』(黒沢清監督)などは、ミニシアターでも上映された。  
 「50-149館」で公開された映画は、外国映画は122本となり、2019年の75本から大幅に増加している。特に増えているのが50-69館の規模で公開された作品で、33本から74本と倍増している。50-149館で公開された日本映画は104本で、前年の121本から17本減少しているものの、割合としては大きな変化はなかった。  
 公開規模が50-149館クラスの作品は、地域によってシネコンで公開されることもあれば、ミニシアター/既存興行館で公開されることもある。2020年、外国映画の大作がほとんど公開されなかったため、シネコンではこれまで上映してなかったようなミニシアター系の作品『シチリアーノ 裏切りの美学』(2019|マルコ・ベロッキオ)、『パ

fig. 09  
 2020年に映画館で公開された  
 作品の公開規模

日本映画 公開館数	2020				2019						
	シネコンのみ	シネコン+ ミニシアター	ミニシアターのみ	割合	シネコンのみ	シネコン+ ミニシアター	ミニシアターのみ	割合			
300館以上	34	8%	34	0	43	7%	43	0	0		
150-299館	34	8%	26	8	39	7%	38	1	0		
100-149館	35	8%	20	15	47	8%	28	19	0		
70-99館	32	7%	17	15	32	6%	16	14	2		
50-69館	37	8%	16	17	42	7%	22	16	4		
30-49館	49	11%	12	21	55	10%	28	15	12		
10-29館	89	20%	18	13	125	22%	42	21	62		
9館以下	130	30%	12	6	194	34%	13	18	163		
以上小計	440	100%	155	35%	577	230	40%	104	18%	243	42%
その他 (特集での1回上映など)	42				73						
合計	482				650						
49館以下	268				374						
うちミニシアターのみ	186	69%			237	63%					

外国映画 公開館数	2020				2019						
	シネコンのみ	シネコン+ ミニシアター	ミニシアターのみ	割合	シネコンのみ	シネコン+ ミニシアター	ミニシアターのみ	割合			
300館以上	14	3%	14	0	32	6%	32	0	0		
150-299館	13	3%	11	2	18	4%	16	2	0		
70-149館	48	12%	9	35	42	8%	17	23	2		
50-69館	74	18%	7	56	33	6%	3	20	10		
30-49館	91	22%	6	37	97	19%	4	44	49		
10-29館	123	30%	20	28	174	34%	25	27	122		
9館以下	52	13%	11	2	118	23%	17	9	92		
以上小計	415	100%	78	19%	514	114	22%	125	24%	275	54%
その他 (特集での1回上映など)	125				128						
合計	540				642						
49館以下	266				389						
うちミニシアターのみ	162	61%			263	68%					

日本映画+外国映画	2020	2019
公開館数	1022	1292

ブリック 図書館の奇跡』(2019|エミリオ・エステベス)、『マティアス&マキシム』(2019|グザヴィエ・ドラン)、『鷺鳥湖の夜』(2019|ディアオ・イーナン)、『赤い闇 スターリンの冷たい大地で』(2019|アニエッシュカ・ホラント)、『燃ゆる女の肖像』(2019|セリーヌ・アマ)、『マルモイ ことばあつめ』(2019|オム・ユナ)といった作品にも手を伸ばし、旧作の小特集も上映するなどプログラミングに腐心している。

2019年の外国映画は、「シネコンのみ」で公開されたものが22%、「シネコンとミニシアター」両方で公開された作品は24%、「ミニシアターのみ」で公開されたものが54%の割合であったが、2020年は、「シネコンのみ」19%、「シネコンとミニシアター」39%、「ミニシアターのみ」43%となり、「シネコンとミニシアター」両方で公開される作品が24%から39%と15%も増えており、「ミニシアターのみ」で上映される作品は11%減少している。ブロックバスターと言われるようなアメリカ映画の大作の公開が止まってしまったことで、ある意味では、シネコンの上映作品の多

様化が進んだ(多様化を余儀なくされた)とみることができる。メジャーな大作がシネコンで公開され、アート系・インディペンデント系の作品はミニシアターで公開されるという明確な線引きはもはや無くなっている。

とはいえ、ミニシアターでしか上映されない作品は数多く存在する。「49館以下」の公開作品は、日本映画で268本、外国映画では266本に上る。これらの作品のうち、日本映画で186本(69%)、外国映画で162本(61%)がミニシアターのみでの公開となっている。その中には、『その手に触れるまで』(2019|ダルデンヌ兄弟)、『名もなき生涯』(2019|テレンス・マリック)、『ホモ・サピエンスの涙』(2019|ロイ・アンダーソン)、『マーティン・エデン』(2019|ピエトロ・マルチェッロ)、『異端の鳥』(2019|ヴァーツラフ・マルホウル)といった、国際映画祭で高い評価を受けた作品や巨匠たちの作品も含まれており、『トルーマン・カポーティ 真実のテープ』(2019|イーブス・バーナー)、『死霊魂』(2018|ワン・ベン)、『ようこそ、革命シネマへ』(2019|スハイ

ブ・ガスマルバリ)、『彼らは生きていた』(2018|ピーター・ジャクソン)等の重要なドキュメンタリーもミニシアターのみで上映されている。

日本映画でも、『プリズン・サークル』(2019|坂上香)、『精神0』(2019|想田和弘)、『れいわ一揆』(2019|原一男)、『ジャズ喫茶ベイシー Swiftyの譚詩(Ballad)』といったドキュメンタリー映画や『本気のしるし 劇場版』(2020|深田晃司)や『無頼』(2020|井筒和幸)、『BOLT』(2020|林海象)といった重要な監督の作品、『アイヌモシリ』(2020|福永壮志)、『ドロステのはてで僕ら』(2020|山口淳太)、『セノータ』(2020|小田香)、『VIDEOPHOBIA』(2020|宮崎大祐)など、若手監督の野心作などは、ミニシアターでしか上映されていない。→ [fig.09](#)

## 公開作品の種類

2020年、前年の公開本数の凡そ74%となる482本の日本映画が公開された。その内訳をみると、劇映画・アニメーションの新作が367本、ドキュメンタリー映画が60本、公演やライブ等のODSが13本、特集上映(短篇・若手・その他)が8企画42本となっている。

2019年の71本には及ばなかったものの、2020年も多くのドキュメンタリー映画が劇場公開された。『三島由紀夫vs東大全共闘 50年目の真実』、『なぜ君は総理大臣になれないのか』、『はりぼて』、『ムヒカ 世界でいちばん貧しい大統領から日本人へ』などは、シネコンでも上映され、多くの観客を集めている。緊急事態宣言で映画館が休館を余儀無くされる中、配給会社東風と想田和弘監督は「仮設の映画館」という配信サイトを立ち上げ、『精神0』は配信で公開が始まり、映画館再開後、劇場公開された。

アニメーションは、300館以上で公開される人気シリーズから10数館での小規模公開作品まで60本ほどが公開されているが、そのほとんどがシネコンで上映されている。また、緊急事態宣言解除後の6月、映画館が新作の公開延期に苦慮する中、「一生に一度は、映画館でジブ

りを。」という印象的なコピーで、スタジオジブリ製作の4作品『風の谷のナウシカ』『もののけ姫』『千と千尋の神隠し』『ゲド戦記』が全国372館で上映された。

日本映画の特集(名画座等での旧作の特集除く)は、8企画を確認したが、そのほとんどは若手監督の作品をまとめて上映するもので、池袋シネマ・ロサ、K'sシネマ、テアトル新宿等のミニシアターのみで上映されている。

ODSの公開は、2019年の32本から2020年は13本と大幅に減少している。

外国映画は、2020年は415本が公開された。2019年の公開本数514本の凡そ81%となる。その内訳は、劇映画・アニメーションの新作が288本、ドキュメンタリー映画33本、ODS31本、旧作デジタルリマスター版のリバイバル公開が14本、旧作の特集上映が12企画49本となっている。さらに、東京の1館(あるいは2,3館)のみで特集上映された作品125本を加えると合計540本となる。

新作の公開延期が続く中、多くの旧作の特集上映が行われた。「ジャン=ポール・ベルモンド傑作選」、「生誕100年 フェデリコ・フェリーニ映画祭」、「ミシェル・ルグランとヌーヴェルヴァーグの監督たち」といった特集は好評を博し、

ロベール・ブレッソン監督やフレディ・ムラー監督の小特集、セルゲイ・ロズニツァ監督三部作(『アウステルリッツ』『国葬』『肅清裁判])なども話題を集めた。また、シネコンでは『TENET テネット』の公開を記念して、「ノーラン夏祭り」として、クリストファー・ノーラン監督の4作『ダンケルク』『ダークナイト』『インセプション』『インターステラー』が上映され、多くの映画ファンを集めた。『燃えよドラゴン ディレクターズ・カット』(73)の公開に合わせて、ブルース・リー主演4作品の特集も行われた。

また、旧作のデジタルリマスター版のリバイバル公開としては、『バック・トゥ・ザ・フューチャー』『バック・トゥ・ザ・フューチャーPART2』『バック・トゥ・ザ・フューチャーPART3』や『トータル・リコール』『地獄の黙示録 ファイナル・カット』といった大作に、クラシック映画『天井桟敷の人々』や実験映画『天使 L'ANGE』、音楽映画の名作『真夏の夜のジャズ』、また、『海の上のピアニスト』、『エレphantマン』といった作品が公開され、映画ファンを集めている。

外国映画のODSは、METライブビューイング、英国ロイヤル・オペラ・ハウス、ナショナル・シアターライヴ等のシリーズがシネマコンプレックスを中心に公開されている。→ [fig. 10](#)

fig. 10  
2020年に公開された映画の分類

日本映画	2020	前年比	2019
一般映画新作(アニメーション)	63	67%	94
一般映画新作(劇映画)	304	80%	380
ドキュメンタリー	60	85%	71
ODS	13	41%	32
特集上映(短篇・若手・その他)	42	58%	73
<b>日本映画合計</b>	<b>482</b>		<b>650</b>

外国映画	2020	前年比	2019
一般映画新作(アニメーション)	16	100%	16
一般映画新作(劇映画)	272	82%	330
ドキュメンタリー	33	60%	55
ODS	31	66%	47
旧作デジタルリマスター版	14	40%	35
特集上映(旧作デジタルリバイバル)12企画	49	158%	31
<b>以上小計</b>	<b>415</b>	<b>81%</b>	<b>514</b>
1館(あるいは2,3館)のみでの上映	125	98%	128
<b>外国映画合計</b>	<b>540</b>	<b>84%</b>	<b>642</b>

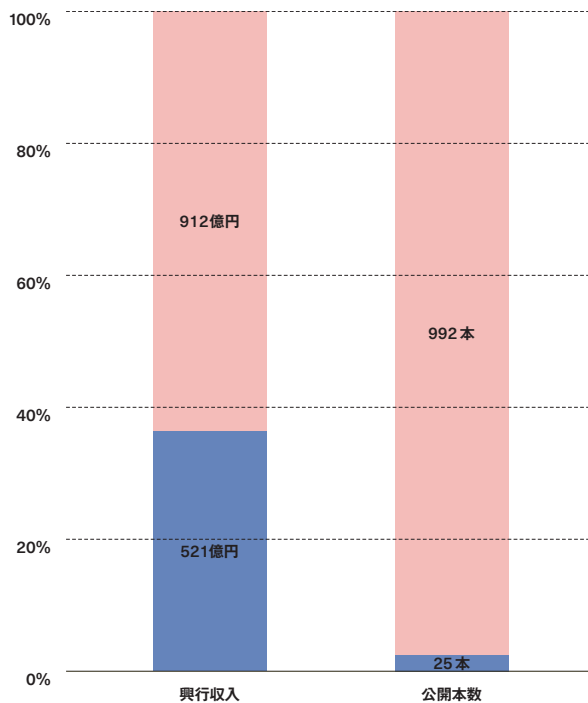
  

<b>日本映画+外国映画</b>	<b>1022</b>		<b>1292</b>
------------------	-------------	--	-------------

## 興行収入10億円を超える映画/ 10億円以下の映画

2020年、興行収入が10億円を超える映画は邦洋合わせて25本(2019年は65本)なった。本数では全公開本数1017本の2.5%、興行収入では、日本映画約856.3億円、外国映画161.4億円で合計912.3億円となり、全興行収入の63.7%を占めている。これは、2019年の76.9%から大幅に減少しており、ここにもコロナによる大作の公開延期や中止の影響をみる事ができる。→ [fig. 11, 12, 13, 14, 15](#)

**fig. 11**  
興行収入10億円以上の作品/  
興行収入10億円未満(2020)



**fig. 12**  
興行収入10億円以上の映画/  
興行収入10億円未満の映画  
(2011-2020)

	興行収入(億円)					
	全体	10億円以上		10億円未満		
	興収	割合	興収	割合	興収	割合
2011	1,812	1,313	72.4%	499	27.6%	
2012	1,952	1,391	71.3%	561	28.7%	
2013	1,942	1,379	71.0%	563	29.0%	
2014	2,070	1,411	68.2%	659	31.8%	
2015	2,171	1,595	73.5%	576	26.5%	
2016	2,355	1,763	74.9%	592	25.1%	
2017	2,286	1,618	70.8%	667	29.2%	
2018	2,225	1,563	70.2%	662	29.8%	
2019	2,611	2,009	76.9%	602	23.1%	
2020	1,433	912	63.7%	521	36.3%	

	公開本数					
	全体	10億円以上		10億円未満		
	興収	割合	興収	割合	興収	割合
2011	799	54	6.8%	745	93.2%	
2012	983	59	6.0%	924	94.0%	
2013	1117	56	5.0%	1061	95.0%	
2014	1184	49	4.1%	1135	95.9%	
2015	1136	61	5.4%	1075	94.6%	
2016	1149	61	5.3%	1088	94.7%	
2017	1187	62	5.2%	1125	94.8%	
2018	1192	54	4.5%	1138	95.5%	
2019	1278	65	5.1%	1213	94.9%	
2020	1017	25	2.5%	992	97.5%	

fig. 13  
2020年興行収入10億円以上作品  
[日本映画]

順位	公開月	作品名	興行収入 (億円)	配給会社
1	10月	劇場版「鬼滅の刃」無限列車編	365.5	東宝   アニプレックス
2	7月	今日から俺は!!劇場版	53.7	東宝
3	7月	コンフィデンスマンJP プリンセス編	38.4	東宝
4	8月	映画ドラえもん のび太の新恐竜	33.5	東宝
5	8月	事故物件 恐い間取り	23.4	松竹
6	8月	糸	22.7	東宝
7	9月	劇場版 ヴァイオレット・エヴァーガーデン	21.3	松竹
8	1月	カイジ ファイナルゲーム	20.6	東宝
9	8月	劇場版 Fate/stay night [Heaven's Feel] III. spring song	19.5	アニプレックス
10	19   12月	僕のヒーローアカデミア THE MOVIE ヒーローズ:ライジング	17.9	東宝
11	19   12月	男はつらいよ お帰り 寅さん	14.7	松竹
12	2月	犬鳴村	14.1	東映
13	2月	ヲタクに恋は難しい	13.4	東宝
14	10月	罪の声	12.2	東宝
15	10月	浅田家!	12.1	東宝
16	2月	スマホを落とすだけなのに 囚われの殺人鬼	11.9	東宝
17	9月	映画クレヨンしんちゃん 激突!ラクガキングダムとほぼ四人の勇者	11.8	東宝
18	19   12月	午前0時、キスしに来てよ	11.7	松竹
19	19   12月	ルパン三世 THE FIRST	11.6	東宝
20	19   12月	屍人荘の殺人	10.9	東宝
21	1月	AI崩壊	10	WB
合計			750.9	

fig. 14  
2020年興行収入10億円以上作品  
[外国映画]

順位	公開月	作品名	興行収入 (億円)	配給会社
1	19   12月	スターウォーズ/スカイウォーカーの夜明け	73.2	WDS
2	1月	パラサイト 半地下の家族	47.4	ビターズ・エンド
3	9月	TENET テネット	27.3	WB
4	1月	キャッツ	13.5	東宝東和
合計			161.4	

fig. 15  
2020年興行収入上位20作品

順位	公開月	作品名	興行収入 (億円)	配給会社
1	10月	劇場版「鬼滅の刃」無限列車編	365.5	東宝   アニプレックス
2	19   12月	スターウォーズ/スカイウォーカーの夜明け	73.2	WDS
3	7月	今日から俺は!!劇場版	53.7	東宝
4	1月	パラサイト 半地下の家族	47.4	ビターズ・エンド
5	7月	コンフィデンスマンJP プリンセス編	38.4	東宝
6	8月	映画ドラえもん のび太の新恐竜	33.5	東宝
7	9月	TENET テネット	27.3	WB
8	8月	事故物件 恐い間取り	23.4	松竹
9	8月	糸	22.7	東宝
10	9月	劇場版 ヴァイオレット・エヴァーガーデン	21.3	松竹
11	1月	カイジ ファイナルゲーム	20.6	東宝
12	8月	劇場版 Fate/stay night [Heaven's Feel] III. spring song	19.5	アニプレックス
13	19   12月	僕のヒーローアカデミア THE MOVIE ヒーローズ:ライジング	17.9	東宝
14	19   12月	男はつらいよ お帰り 寅さん	14.7	松竹
15	2月	犬鳴村	14.1	東映
16	1月	キャッツ	13.5	東宝東和
17	2月	ヲタクに恋は難しい	13.4	東宝
18	10月	罪の声	12.2	東宝
19	10月	浅田家!	12.1	東宝
20	2月	スマホを落とすだけなのに 囚われの殺人鬼	11.9	東宝
合計			856.3	
2020年興行収入			1432.9	2611.8(2019年)
2020年興行収入10億円以上作品			912.3	2008.8(2019年)
興行収入10億円以上作品の割合			63.7%	76.9%(2019年)

